

谷崎文学における死の意味

－同性愛から男女関係の心中へ－

吉美顕*
goldmountian@hanmail.net

<目次>

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. はじめに | 3. 嫉妬から男女関係の心中へ |
| 2. 同性愛から見えている嫉妬 | 4. 終りに |

主題語: 同性愛(Homosexual), 心中(commit uicide together), 嫉妬(jealousy), マゾヒズム(masochism), デイズム(sadism), 崇拜(worship), 男女関係(the relation between the sexes)

1. はじめに

「美しい者は強者である」¹⁾という唯美主義を展開してきた谷崎文学について、思想がないという批判があり、特に中期においては「思想のないエグゾチスムの美の作家」とも言われた。さらに佐藤春夫も、谷崎の「耽美主義官能主義だつて一つの思想なのだ」²⁾という半面「思想なき芸術家」³⁾であると言っているし、谷崎の弟の精二さえその意見に賛成している。しかし佐藤春夫が指摘している通り、耽美主義も「一つの思想」と考えられるので、谷崎を「思想のある芸術家」と容易に切り捨てることはできないだろう。谷崎文学は一言で断言できないのだが、彼は明治・大正・昭和にわたって「美しい者は強者である」という美意識を追求しており、その描写のためいろいろな要素を使っている。その中で一つは死を通じるエロティシズムの表出である。谷崎は大正期の「金色の死」(「東京朝日新聞」

* 又松大学 日本文学 兼任教授

1) 谷崎潤一郎(1981)「刺青」『谷崎潤一郎全集第一巻』中央公論、p.63

2) 伊藤整(1991)「谷崎潤一郎の芸術と思想」『群像日本の作家8 谷崎潤一郎』小学館、p.53

3) 佐藤春夫は「秋風一夕話」の中で、谷崎は果たして思想があるかないかを論じている。

「『思想のある芸術家』でおもひ出すのだが、谷崎潤一郎はまた珍しいほど所謂思想のない芸術家だと思ふ。耽美主義官能主義だつて一つの思想なのだ。」佐藤春夫(1989)「秋夕一夕話」『佐藤春夫全集第1巻』講談社、p.205

1914.12.4.~7)では岡村君の「死」を通して、中性美の世界を描写し、昭和期の「卍」(「改造」昭和3.3~昭和5.4)では同性愛による心中、「鍵」(「中央公論」1956.1)では、中年夫婦の性による死、晩年の作品である「癡癡老人日記」(「中央公論」1961.11-1962.5)では、マゾヒズムの死が描かれている。それで、谷崎文学における美の構造を把握するためには、何よりも谷崎作品に表れている「死」の意味を辿る必要がある。ところが、「死」の問題は、谷崎初期の作品にはあまり見あたらず、谷崎は、関西移住後、大正、昭和期には「死」の問題を積極的に扱っている。特に昭和期の作品に現れてる「死」は性的要素とも密接な関係がある。したがって、本稿では、昭和期の作品「卍」を中心に、同性愛から男女関係の心中へ変わっていくつまり、主人公たちの死に現れている美のメカニズムについて考察してみたい。

2. 同性愛から見えている嫉妬

「卍」は、柿内園子未亡人が知人の作家を訪れ、自らの異常な恋の体験を語り始めるところから始まっている⁴⁾。柿内夫人は結婚後の浮気や夫の孝太郎とは生理的に合わず、一つ年下の徳光光子と同性愛に陥り、その恋に関して先生に告白している⁵⁾。「卍」の語り手は柿内夫人であり、彼女の話は事件、回想に従って展開していき、それは挿話されているような感じもする。このように、「卍」の物語は、事件後から始まるのが特徴であり、それは、「〈結末〉としての、〈現在〉から、事件のはじまりに向かって逆行しつつ経験」をあきらかにしており、「再び〈現在〉へと回帰する現状」⁶⁾の語りである。

佐伯彰一は柿内夫人の語りの特徴は、「一人称の告白体であるが、本質的に劇的であり」「説明や分析よりは、場面と会話を中心にして、ドラマチックな動きを描き揚げようとするものであると評価している⁷⁾。先生は柿内夫人に「夫に過去の過ち隠しとくのんよろしくないから、——殊に肉体上の関係なかったのんなら告白し易い訳やから、すべてを打ち明けておしまいなさい」と言うが、彼女は、現在はおとなしくしているから夫も安心してお

4) 「先生、私は今日はすっかり聞いてもらうつもりで伺いましたのですが、折角仕事中的とこかまいませんですやろか？それはせめてもい少し自由に筆動きましたら、自分でこの事何から何まで書き留めて、小説のやうな風にまとめて、先生に見てもらおうかと思たりしましたのんですが。」

5) 「夫に過去のあやまち隠しとくのんよろしくないから、——殊に肉体上の関係なかったのんなら告白し易い訳やから、すべてを打ち明けておしまいなさい」と先生は云って下さいましたけど(後略)ー」

6) 永栄啓伸(1992)『谷崎潤一郎論 伏流する物語』双文社出版、p.137

7) 佐伯彰一(1979)『谷崎・芥川・三島物語芸術論』講談社、p.115

り、夫もうすうす気付いているだろうと思い、話さない。柿内夫人の夫は弁護士であり、知的な存在、さらに性には全然関心のない人物として描写されている。その理由で、彼は妻が同性愛に陥ってもまったく動揺しないのである。柿内夫人の二回目の浮気は、光子との同性愛である。それは、上で述べたように、夫の学者肌が気に入らない、「いいつつても書生流のぶっきらぼう抜けしませんし、あいそは下手」だからなのである。

柿内夫人は、「天王寺の方」にある女子技芸学校で音楽、絵、裁縫などを稽古している。ある日、柿内夫人は、「楊柳観音の姿」をしている「Y子さんの19歳の娘さん」を写生するのであるが、校長先生は、彼女の写生をみて、「柿内さん、あなたの絵エはちょっとモデルに似ておらんやうですな、あんなは誰ぞ、外にモデルあるのんではありませんか」と言う。彼女が描いたのは、一年前に自分自身と同性愛に陥っていた光子だったのである。柿内夫人は以前から光子のことを「綺麗な人」だと思い「光子さんが通ると、それとなう傍へ寄って行ったり」した。彼女は、光子が通った後の「空気までが綺麗なような」気がしたと述べている。

ここで注目すべき言葉は、「楊柳観音」である。「楊柳観音の姿」をしている19歳の女の肖像画が、柿内夫人の絵では、光子の顔になっている。「卍」では柿内夫人にとって光子は理想の女性であり、彼女を「観音」に設定している。柿内夫人が自分の理想の女に「楊柳観音」を投影しているのは、これから光子が彼女の崇拜の対象になることが想定できる。

柿内夫人は光子とはあまり話したこともないのだが、光子は気になる存在である。しかしやがて柿内夫人と光子は友達になり、京都へ遊びに行く。

ついきさき迄まだその辺に人がチラホラしてましたのんに、もうてつぺんから麓までだあれも人影ありません。-(中略)-生駒山のケーブル・カアのイルミネーションがずうっと数珠のようにつながって、紫色した霧のあいだから、ところぐ絶えては続いてまだ、います。その光見ると、わたし、何やしらん息詰まるように感じたのですが、-(中略)-「好きな人と二人だけやったらこんな淋しい所の方がえ、わ」と、そない云って光子さんはためいきついてをられました。「うちあなたと一緒にやったらいつ迄でも此処でこないしてたいわ」-(中略)-光子さんの白い足袋の向うに、大仏殿の金の鯨鋒が空のうすあかりに底光りました。

上の引用文は光子と柿内夫人とのデートの場面であり、美しくエロティックな風景と光子との調和が目立つ。このように光子のエロティックな美は、柿内夫人の語りによって形成されるのも特徴である。柿内夫人の口調とこの場面からは光子像が窺える。

柿内夫人は「ほんとの光子さんは此の神々しさの上にちょっと肉感的などこあるねんけ

ど、日本画にしたらその感じが出えへんねん」と、嘆きつつも絵を完成する。その絵の顔は光子と似ているが、体は似ていないことに気付いた柿内夫人は、光子に裸の写生をしたいと提案する。柿内夫人は光子に断られる不安を抱えていたのであるが、以外に光子は素直に承諾する。柿内夫人が光子の裸体を描くために、光子を柿内夫婦の寝室に連れていく。光子が柿内夫婦の寝室に入ってモデルになったというのは意味深い。それはこれから展開していく内容の複線、つまり柿内夫婦の中に光子が介入して柿内夫婦の仲が壊れてしまうという複線だからである。柿内夫人は、光子の裸にベッドのシーツをつけるのだが、光子の後姿をみた柿内は、彼女の肌に魅了されて彼女を抱く。

「あんな、こんな綺麗な体やのんに、なんで今迄隠してたん？」と、わたしはどうとう口に出して恨みごと云ってしまいました。そして「あんまりやわ、あんまりやわ」云うてるうちに、どう云う訳や涙が一杯たまって来まして、うしろから光子さんに抱きついて、涙の顔を白衣の肩の上に載せて、二人して姿見のなかを覗き込んでいました。

上の引用文のように柿内夫人は、光子の裸があまりにもきれいで涙ぐむのであった。柿内夫人は彼女の裸にかけられているシーツを外してほしいと望んだが、光子に断られる。その結果、二人はもめるが、柿内夫人はシーツの破れ目から光子の盛り上がっている白い肌をのぞいて魅了されてしまうのである。結局、二人は和解して、光子の体に纏われているシーツを外すことになる。柿内夫人は、そのシーツを解いていくうちに、彼女の体を見て「神聖な処女の彫像が現れて来ます」と、勝利を感じる。

「憎たらしい、こんな綺麗な体してて！うちあんな殺してやりたい」わたしはさう云って光子さんのふるてる手首しっかり握りしめたまま、一方の手で顔引き寄せて、唇持って行きました。すると突然光子さんの方からも、「殺して、殺して、——うちあんなに殺されたい——」と、物狂わしい声聞こえて、それが熱い息と一緒に私の顔かかりました。見ると光子さんの頬にも涙流れてるのんです。二人は腕と腕とを互の背中で組み合せて、どっちの涙やら分らん涙飲み込みました。

柿内夫人はシーツを解きながら、「勝利のほほえみを、——冷やゝかな、意地の悪いほほえみを口もとに浮かべて」いる。これは、光子をねじ伏せ、自分の欲情満たしたという満足感である。つまりこれはサディズムの発露であると見られる。また、この二人の対話から感じられるのは、マゾヒズムとサディズムの世界である。谷崎文学の特徴といえば、男性

が女性を教育して、その教育によって女性の方が自分に内在している魔性に気付き、男性を征服するサディズムやそのような女性の前で跪くことを喜んでいる男のマゾヒズムである。谷崎の作品の中で妖婦的で、悪魔的な女の体を耽溺するのは男の役割であるが、ここでは、柿内夫人がそれを担当しており、谷崎が描いてきたマゾ・サゾとは異なる心理的なマゾ・サゾが表れている。河野多恵子は谷崎が関西移住後、「卍」という作品を通して「心理的なマゾヒズム」⁸⁾を描写していると言及している。柿内夫人は光子の体に魅了され「殺したい」と考え、光子はそのような行動をみて「殺されたい」と考えていることから心理的なマゾ・マゾが窺える。二人は何かの刺激を与えて喜びを感じたり、虐げられてうれしさを感じたりするのではなく、光子は柿内夫人の心理的欲望の行動に反応しているだけの願望的なマゾヒズム的な存在である。このように谷崎は「卍」で、同性愛によるマゾ・サゾを上手に取り込んでいるが、それは心理的なマゾ・サゾである。そのマゾ・サゾの絶頂を表しているのは二人の「涙」である。また、谷崎は心理的なマゾヒズムの描写のために、「高貴の女性」を登場させていることに注目したい。光子は「船場の方にお店のある羅紗問屋のお嬢様」であり、柿内夫人は、家柄がよくて金持ちで、夫の弁護士の資金をも支援出来る家柄の人である。関西では、このような女性は「高貴の女性」と見られている。谷崎はこれまで女性に人格、学歴、高貴さは求めておらず、「強者として」の美的な女性を追求していた。その意味で「卍」で「高貴の女性」の登場は谷崎がこれまで女性とは異なる女性像である。

谷崎作品の男主人公たちは女の身体の一部に執着している。例えば、谷崎の初期作品の「刺青」の清吉は「足」に、「麒麟」(「新思潮」4号、明治43.12)の靈公は妖婦的な要素に、中期作品の「痴人の愛」(「大阪朝日新聞」大正13.3.20~6.14)では西洋人のようなナオミの白い肌に、晩年の作品「癡癡老人日記」(「中央公論」昭和36.11~昭和37.5)では「足」に執着している。ところが、「卍」では、身体の一部が具体的に描写されているのではなく、綺麗でエロティックな体の全体像が描かれている。

二人は、お互いの心を手紙で告白している。その手紙の内容は二人とも恋しくて恋しくてたまらないというのである。次の二人の手紙の内容からは同性愛の恋心がよく窺える。

—(前略)—なんだかうっとうしい晩だけれど、軒端を伝う雨の雫に静かに耳を傾けていると、思いなしかそれがやさしい囁きのように聞えて来る。しとゝゝゝ……………何をささやいているのか知らん？しとゝゝゝ……………ああそうだ、光子光子光子、……………恋しい人の名を呼んでいるのだ。徳光徳光、……………光子光子、……………

8) 河野多恵子(1991)「心理的マゾヒズムと関西」『群像 日本の作家8 谷崎潤一郎』小学館、pp.12-19 参照。

・・・・・・・・徳、徳、徳、・・・・・・・・光、光、光、・・・・・・・・あたしはいつの間にかペンを取って、左の手の指の先へ「徳光」と云う字や「光子」と云う字を数限りもなく書いていた、親指から小指まで順々に。・・・・・・・・堪忍して頂戴、こんなつまらないことを書いて。

同性愛の主査は、柿内夫人であり、能動的な態度を取っている。光子は、消極的であり、受け入れる立場である。この手紙からも心理的マゾ・サゾが窺える。ますます柿内夫人からの光子への恋は「前の人思ったのより十倍も二十倍も、・・・百倍も二百倍も熱烈」なものに変わっていく。柿内夫人は同性愛に対しても罪意識はない。むしろ彼女は、「夫に内証で外の男愛したら悪いやろけど、女が女恋するねんよってかめへん。いつもそんな理屈つけて自分の心欺いて」いた。二人の恋はどんどん深くなり、「覚悟しているわ。姉ちゃんあてが死ぬ云ったら一緒に死んでくれうなあ!」、「死ぬわ、死ぬわ、光ちゃんかつて死んでくれるなあ?」と話を交わす。この言及からは二人にとって「死」という問題が重要な位置を示していることが分かり、「死ぬ」というのは結末の複線であり、以後の作品の内容も「死」に向かって展開していくことも想定できる。

しかし、二人の関係にはひびが入ってしまう事件が起こる。それは、光子が前の婚約者(綿貫)と密会して着物や財布を取られてしまうことである。光子には綿貫という婚約者がいたが、光子と柿内夫人が同性恋に陥り、それが噂になると、光子と綿貫は破婚になる。光子は綿貫と一緒に温泉へ行くが、財布や着物を取られて、家に帰ることが出来なくなり柿内夫人に電話してきてもらう。柿内夫人は綿貫の存在を知らずに着物やお金を持って、温泉宿に行くが、そこに綿貫という男がいてびっくりする。その男は、いかにも光子が好みそうな輪郭の整った顔をしており、「美男子」でもあった。柿内夫人はその男から光子との婚約が破綻になったことと、「自分を愛するよりももっと熱烈に奥様愛するようになったよって、自分の方がどれぐらい嫉妬感じたか分れへん」という話を聞かされる。

同じ恋愛でも同性の愛と異性の愛とはまるきり性質違うよって、奥様との仲は許して貰わんと、自分との仲も続けて行く訳にいかん様に光子さん云いますので、自分も近頃は諒解していた。「あての姉ちゃんかつて夫あるねんもん、あてもあたと結婚することはするけど夫婦の愛は夫婦の愛、同性の愛は同性の愛よって、姉さんのことは一生よう思い切らんさかいそのつもりでいて頂戴。

綿貫は二人の関係を知りながらも光子と会っていたのである。綿貫の嫉妬は激しくな

り、その嫉妬から柿内夫人と手を繋いで、光子を困惑させようとする。いままで順調だった同性愛は綿貫という男が参入することによって壊れていく。柿内夫人は嫉妬と綿貫への猜疑にとらわれて苦悩するが、光子に心を奪われているので光子のことが気になって仕様がなない。

ある日、光子は柿内夫人に電話して中川という人が妊娠しており、柿内夫人の妊娠中絶の本を借りて、子供を下ろしたいということ、その本を持っている人は危険に落ちる可能性があると伝える(当時は、病院での墮胎で医者が捕まえられることがあったという)。この電話を機にぎくしゃくしていた二人の関係が回復し、前のように愛し合うようになる。

光子は「異性の愛より同性の方が好きで」、綿貫より柿内夫人から愛されることを望んでいる。光子は「同性の人に崇拜しられる時が、自分は一番誇り感じ」るが、それは「男の人が女の姿見て綺麗思うのん当り前や、女で女を迷わすこと出来る思うと、自分がそないままで綺麗のんかいなあ云う気イして、嬉してたまん」と思っているからである。このように、光子は同性に崇拜されたい欲望の強い人に描写されている。谷崎が描いた女性たちは男性の教育によって悪魔的な女に変わり、男性を征服することが一般的であったが、「卍」の光子には男性の教育がなくても強者、悪魔的な要素が内在しており、人目を引く魅力のある存在として描かれている。

(前略)大空の雲よりほかに知っている者のない隠れ場所見つけて、「光ちゃん……………」
「姉ちゃん、……………」
「もうく一生仲好うせうなあ」「あて姉ちゃんと此処で死にたい」
ーと、お互いにそない云ったなり、それから後は声も立立てんと、どのくらいそこにいたのんやら、時間も、世の中も、何も彼も忘れて、私の世界にはただ永久にいとしい光子さん云ふ人があるばかり。

しかし、縊りを戻した二人にまた事件が起こる。柿内夫人は中川という人の妊娠は光子の嘘であり、実は光子本人の妊娠であったことに気付き、驚愕と裏切られたと感じる。柿内夫人は光子の告白と柿内夫人の家での出血と腹痛から光子の妊娠に気付く。こんなことがあったにもかかわらず、光子は平然と柿内夫人に綿貫を紹介し、3人で遊びに行ったりいろいろなことを話し合ったりする。光子は綿貫の前では、柿内夫人の方がもっと好きというふうに見せかけ、柿内夫人の前では、綿貫の方がもっと好きというふうに見せかける。光子は二人の嫉妬を利用して自分自身を崇拜させようとする悪魔的な強者になる。綿貫の参入によって、光子は二人の上で「君臨して意のままに操る女性」⁹⁾に変貌する。このよう

な点からは光子の妖婦的な、悪魔的な面が伺える。ところが、このような妖婦的な要素に魅了されるのは柿内夫人であり、綿貫は揺れない。綿貫はかえって嫉妬に覆われて、妖婦的な光子を陥穽に落としたいと思っているだけである。

柿内夫人は綿貫の告白によって、光子の腹の子供は綿貫の子供ではないことや自分の家での出血や腹痛は狂言であったことが分かる。綿貫は柿内夫人に自分自身は不幸な男であり、彼は、光子が他の男性と結婚しても「夫が何人変わったかてちよっとも影響せえへん、そしたらお姉さんと光ちゃんの愛は夫婦の愛よりも永久不変」だと言っている。

綿貫の話によって、綿貫と柿内夫人は同盟をし、嫉妬と猜疑にとらわれて契約書を書くようになる。また二人は、「同性の愛と異性の愛とはまるきりたちが違う思たらなんにも嫉妬することあれへん。ぜんたいあんな綺麗な人たった一人で愛そ云うのんが間違っている50人も100人も崇拜する人あったかて当たり前」と認めており、光子を共有する。柿内夫人にとって光子は唯一の崇拜の対象であったが、綿貫、それに柿内が加わることによって、光子への崇拜は普遍的なものになる。このような二人の態度について伊藤整は時代の不安を強く感じ、「セックスがいかにか強く人間を支配しているか」、「美がいかにか危険な働きで人間生活を崩壊させるか」、「セックスと人間のエゴとの結びつきの中には、究極の救いが無い」¹⁰⁾と言及している。伊藤が指摘した通り不安定なのは、柿内夫人と綿貫である。その原因は光子のエゴとセックスである。光子は徹底的に自分のエゴを通して、自分自身を崇拜させ、柿内夫人と綿貫に君臨する存在として作りあげていく。これは光子の強者としての誕生である。光子の妖婦性、光子の強者としての振る舞い、光子の嫉妬の誘発によって同性愛が壊れていくのである。

3. 嫉妬から男女関係の心中へ

同性愛の中に綿貫という男の登場によって嫉妬を誘惑させ同性愛が崩れていき、光子は二人の上に君臨する。同性愛が壊れたという証拠は、綿貫と柿内夫人との契約書がそれである。この契約書は同性愛を壊す、柿内夫妻の夫婦関係を崩す、さらに、光子と柿内が男女関係になるキーワードになっている。

9) 前田久徳(2000)『谷崎潤一郎物語の生成』洋々社、p.122

10) 永栄啓伸(1992)『谷崎潤一郎伏流する物語』双文社出版、p.133

光子は契約書のことについては知らないのであるが、二人の腕の傷を見て、二人が自分の知らないところで会っていることに気付き、嫉妬を感じて綿貫の秘密について柿内夫人に言ってしまう。柿内夫人は光子の嫉妬の眼さえ妖艶で、なんとも言えないほどなまめかしい風情があると思っている。光子の話によれば綿貫は幼いころ「お多福風」を煩ったので性不能になってしまったという。彼はそれにもかかわらずいろいろな女性と付き合い、女の人を弄んだ。

あんなあの人の仇名知ってる？云いますよって、「知らん」云いなさると、『『100%安全なるステッキ・ボーイ』と云ってクスクス笑ってるのんやそうです。(中略) 綿貫云う人は無能力者で、中性の人間や云う噂ある、而もそれにはちゃんとして証人あるのんや云いますねん。

綿貫は、性的無能力者であったため、いつもプラトニック的な恋を求めており、「結婚せん先に肉体的関係結ぶ云うのん罪悪」だと思っている。綿貫が付き合っていた女性の中で、同性愛の女がいたのであるが、彼女が綿貫のことを「男女」やとか「女男」やとか言っていたという。綿貫は性正体性の人であったかもしれない。言い換えれば中性と言えるであろう。綿貫は男性の中で一番えらい人としてお釈迦とキリストを挙げながら、「ギリシヤの彫刻かて男性でも女性でもない中性の具現はしている」、「観音さんや勢至菩薩の姿」だと主張している。綿貫は、人間の中で一番気高いのは中性だと認識しており、だからこそ結婚して子供を生むのを「動物の愛で、精神的恋愛楽しむ人」が最高の人に違いないと思っている。綿貫のように中性美を主張しているのは「金色の死」(『東京朝日新聞』1914.12.4~7)の岡村君と「創造」(『中央公論』1915.4)の川端である。岡村君は、「生ける人間の肉体」そのものが美であると思っており、人間の体、それも男の体を選択して「刹那的な美」、中性美、「人工樂園」を具現しようとする。岡村君は「人口樂園」で男女を選んで、「羅漢菩薩」の姿にさせたり、「悪鬼羅刹」を扮させたりする。それから岡村君も「満身に金箔を塗抹して如来の尊容を現じ、其の佞酒呻って」¹¹⁾踊り狂うが、結局、岡村君は金箔のために死んでしまう。岡村君の死について「菩薩も羅漢も悪鬼も羅刹も、皆金色の死体の下に跪いて涙を流しました。」と書かれている。岡村君の死体は「菩薩」のようであると描写されているように、彼の死は「中性美」の象徴であるにちがいない。「菩薩」の言葉は中性美の発露の意味であり、岡村君の「死」は中性美の具現であったのである。

このように、谷崎は大正期に中性美を通した芸術品を試みるが、昭和期には中性美を求

11) 谷崎潤一郎「金色の死」『谷崎潤一郎全集 第2巻』中央公論、p.498

めている綿貫を光子と柿内夫人との関係で外すのである。谷崎が描いた綿貫は、嫉妬にとらわれて同性愛を壊す不安定な存在、死から遠ざかっていく、質の悪い人物として転落してしまう。このような綿貫は、光子と柿内夫人との同性愛の嫉妬に覆われて、狡猾な方法で柿内(柿内夫人の夫)を脅迫する。この事件後、新しい人物が現れる。それは柿内である。

綿貫は柿内に契約書を見せて、光子との間に柿内夫人が挟んで結婚を妨害していると責める。それを聞いた柿内は、光子も家内もかわいそうだと思っているが、妻を呼んで、その経緯について彼女を責める。その話を聞いた柿内夫人は、「死んであなたに謝ります！」と断言して、光子と会い、「もし間違っただけ死んだら光ちゃんしんでくれるなあ？」と言う。光子は「姉ちゃんかれそうやわなあ？」と答えながら、柿内夫人と抱き合っただけ涙を流すばかりである。光子は両親と柿内夫人の夫に遺書二通を残す。ところが、これは光子と柿内夫人との心中の狂言であった。この狂言は「卍」という作品の展開を変える重要な事件になる。それは、光子と柿内夫人との心中狂言中、先に目覚めた光子は柿内との肉体関係を結ぶことで男女関係になるからである。綿貫は同性愛から外され、彼の代わりに柿内という男が登場して、綿貫の役割を担当している。柿内が同性愛の仲間に入って、以前の柿内夫人、綿貫、光子の構図が再現され、再び光子は柿内夫妻の前に君臨して妖婦的で悪魔的な要素を取り戻す。

柿内夫人が薬を飲んで意識を失ったのは半日くらいで眼を開けてみたらはっきりした記憶はなく、吐き気がする。柿内夫人は光子、夫、綿貫と4人でどこかに旅にでて、一緒に寝ていることが幻のように頭に残っている。ところが、柿内夫人は夫がなぜここにいるのか、夫と光子が親しいのかについて疑問を抱えている。彼女は夫と光子は恋愛関係にあり、自分自身に内在している嫉妬を刺激して、思うままに操るのではないかと思う。

つまり綿貫放る代わりに夫とそう云う風になって、私との間に嫉妬起こして、思うままに操ってやろ、どうで自分の崇拝者一人でも仰山寄せ着けときたい性分ですさかい、-(中略)-夫引き入れる手段やつたのんか、なんせえらい複雑で裏には裏ある人の気持ち中々分れしませんけど。多分そんないろゝの動機に時のはずみも加わったのんやろ思いますねん。

光子は毎日、柿内夫妻に睡眠剤を飲ませている。柿内夫人は自分だけ寝かされるのではないという疑問も確かにある¹²⁾。「健全な、非常識なところ微塵もなかった」柿内が、「いつや

12) 「此の光子の計略図にあたって、夫と私とはどんなにお互いに疑い合い、嫉妬し合ったことですよ。毎晩々々薬飲まされるたびに、寝されるのん自分だけやないか、夫はうその薬飲んで寝た真似してるのん違うやろかと、そな思たら、飲んだ風して放ってしまおとしますねんけど。光子さんに

知らん間に魂入れ替わったように「光子の機嫌」をとったりして「綿貫生き写しになって」自分の役割をしているのである。二人は自分だけ騙されているのではないという疑問を抱きながら毎日に光子から薬を飲まされ、胃の調子や顔色もどんどんよくなるのである。ところが、二人は食欲もなくてあまり食べられないが、隣で光子はよく食べてつやつやしており、血色もよくなる。光子だけが「太陽みたいに輝いて見えて」、どんなに疲れていても二人は光子の顔をみたら生き返っているような気がする。二人にとってそれだけが唯一の楽しみである。このように柿内は、忠実にかつての綿貫の役割を演じている。柿内夫妻の間に嫉妬と猜疑が高まっている中、睡眠薬で朦朧とさせられた柿内夫妻の上で光子一人が君臨するのである。光子の行為から女性崇拜はもちろん悪魔的な、妖婦的な女性も窺える。谷崎は、柿内夫婦の間に起こっている嫉妬と同性愛を利用して悪魔的な女性を形成している。

谷崎作品に表れている妖婦的、悪魔的である女主人公たちの名前の中で光子という名前がよく出ている。西荘保はこれらの作品は「少年」(「スバル」明治44.10)、「女人神聖」(「婦人公論」大正6.9~大正7.6)、「永遠の偶像」(「新潮」大正13.2)、「腕角力」(「女性」大正13.2)、「卍」などが挙げ、谷崎の命名への関心は「念頭においてこの事実を眺めるならば、谷崎の「光子」という名前への尋常ならぬ思い入れを痛感せずにはいられまい¹³⁾と言及している。谷崎が描写している「光子」には男性を征服する「強者として」の女が窺えるが、「卍」という作品では、男だけではなく柿内夫人を支配下に置くことに注目したい。さらに光子という名前は「卍」に至っては、男女両性から観音になぞらえられ、やがて光子という名前をつけられ、「光子観音」と神格化されている。また谷崎は女主人公を神格化するためには「菩薩」や「観音」という言葉をよく使っている。

「菩薩」や「観音」という言葉を使って、女性を神格化している作品は昭和期の「春琴抄」(「大阪朝日新聞」1924.3.20.~1925.6.14)である。

仏菩薩の眼、慈眼視衆生という慈眼なるものは半眼に閉じた眼であるからそれを見馴れているわれわれは開いた眼よりも閉じた眼の方に慈悲や有り難みを覚え或る場合には畏れを抱くのであろうか。されば春琴女の閉じた眼瞼にもそれが取り分け優しい女人であるせいがかい絵像の観世音を拝んだようなほのかな慈悲を感ずるのである¹⁴⁾。

会ったらそんな胡麻化しきさんようにじっと手もと見詰めてて、まだそんだけでも心配やのんか、しまいには「飲ましたげるわなあ」と、-(後略)-」

13) 西荘保(1987)『「卍」試論-」印度教による一つのアプローチ-』「日本の文学」、p.193

14) 谷崎潤一郎(1982)『春琴抄』『谷崎潤一郎全集 第2巻』中央公論、p.499

このように、普通の人の目より盲人の目の方が「慈悲や有り難み」を感じられるように、春琴の姿もまた「観世音を拝んだようなほのかな慈悲」を感じ、「盲目沈思」するように見えるのだが、それによって慈悲まで感じるのだと逆説的に描かれている。

強者としての光子は毎日、柿内夫妻に睡眠剤を飲ませる。二人は飲まされた睡眠薬のせいで朦朧としており、柿内の人格の崩壊や幻覚の現象まで起こっている¹⁵⁾。二人はこの世の中に満足することもなく、望みも楽しみもなく、ただ、光子という太陽の光だけが光っていて幸せを感じている。光子は自分自身がどれくらい二人から崇拜されているのかを試している。二人は光子に殺されてしまうのではないかという思いさえある。同性愛をめぐる光子は心理的なマゾヒズムの立場であったが、柿内の前では心理的なサディズムの立場を取っている。柿内は光子の虜になり、光子の魔力に惹かれて自分自身に潜在していた「パッション」に気付く。これは光子の女神のような魔力を受けて動き出す「パッション」に違いないと柿内は思っている。このような柿内の行動は一層光子の神聖化に付けられることである。

柿内夫妻にとって、光子への崇拜は至福の世界であった。「卍」結末の破戒(破滅)と至福の共存について、三島由紀夫は「卍」は、かくて、谷崎氏が容赦なく深淵の中へ手をつつこみ、登場人物を冷酷に破滅へ追い込んでゆく手腕において、卓越なものである。(中略)一人間が最後におちこむ深淵には、性的至福が漲っているのである¹⁶⁾と言及している。三島由紀夫の言及のようになるのは、光子と柿内との性的な関係があってからである。その関係後、光子は柿内にとって、盲目的な崇拜の存在であり、王国の創造者、破滅者になる。野口武彦は、「性的至福」の享受者は「みずから『観音』に化身させた女とその『観音』を信仰した男」とに限定し、柿内夫人については「救われることはない¹⁷⁾と断言している。

ジョルジュ・バタイユ(Georges Bataille)は男女関係のエロティシズムについて、死の不安の中での性行為が喜びを呼び起こすということを述べている¹⁸⁾。エロティシズムは「〈死〉

15) 「あの健全な、非常識などこ微塵もなかった夫までが、いつや知らん間に魂入れ替ったように、女みたいなイヤ味云ったり邪推したりして、青オイ顔ににたにた笑い浮かながら光子さんの御機嫌取ったりしますので(中略)もうその時分の夫云ったら総べての運命に従順になってしもてて、時分が第二の綿貫にさされること拒まんばかりか、却ってそれ幸福に感じてらしいて、薬飲むのんも、しまいに進んで飲まされること願うようになって来ましてん。」

16) 三島由紀夫(1969)「谷崎潤一郎」『作家論』中央公論社、p.78

17) 野口武彦(1973)『谷崎潤一郎論』中央公論社、p.70

18) 「性的な無秩序に結びついた基本的な不安は死を意味する(中略)一方では、肉の痙攣の刺激が高まれば高まるほど衰弱は近くなり、他方では、衰弱が余裕さえ残せば快樂を助長する。死の不安は必ずしも快樂に傾くわけではないが、快樂は死の不安のなかで、一層甚だしくなるのである。」ジョルジュ・バタイユ(1973) 洪澤龍彦訳『エロティシズム』二見書房、p.151

を聖化したかたちで置いてそれを象徴的に踏みこえようとするような¹⁹⁾行為として存在する。このバタイユの考えを応用すると、光子と柿内はセックスの欲望の根底には無意識であれ死を考えているとも言える。二人の性への欲望は死への幻想的な欲望とも繋がっている。このような欲望は他者との関係から発生する。柿内は「自分と他者との間の相克的な欲望の関係」²⁰⁾において、官能的な光子を崇拜するのである。柿内は光子との肉体関係からまたは、光子に飲まされる薬から死という不安を感じるが、「性的な至福」のためには心中しかならないと思っている。その世界の中で官能的な光子への崇拜は一層甚だしくなる。

3人(光子、柿内夫人、柿内)が心中に至る事件が起こる。それは、綿貫が柿内夫人と光子との同性愛を世間に知らせてしまったからである。柿内夫人と光子との恋の手紙まで新聞に載せられる大変な状況になり、光子が第一に「死の」と言い出す。光子によって作られた王国は光子の「死の」という言葉で壊れてしまう。三人は外に出たら捕まえられると思い、部屋の壁に「観音様の画像」を飾って、三人寄ってお線香あげて「此の観音様の手引やったら、あて死んだかて幸福や」と、「僕死んだら、此の観音様『光子観音』云う名アつけて、みんなして拝んでくれたら浮かばれるやろ」と柿内夫婦は言う。柿内夫妻は、死によって光子を永遠なる女性にしている。さらに、柿内は光子がすべての人間に崇拜される存在になってほしいという願望まで感じている。このような面からみれば「卍」では「卍」という表題の意味と内容は一致していることが分かる。卍はインド教では、破壊と創造の女神を意味しており、その女神は光子である。表題の「卍」は光子の象徴に違いない。「エロティシズムは、かかる状況の不可能にかかっているのではなからうか? 芸術のエロティシズムに対する最終的な勝利は、状況の創造にあるのではないだろうか?」²¹⁾と言っている三島の言及からも光子はエロティシズムそのものであり、エロティシズムの世界を作る創造者でもある。

柿内夫人の最初の絵は「楊柳観音」の写生であったが、いつの間にか、「楊柳観音」に光子の顔が移っている。三人の心中に至っては、光子は官能的で猛々しい女神として描写されている。それは「楊柳観音」の光子が「光子観音」に変わったことから窺える。柿内夫人は、夫(柿内)の前で「光子さんほど姿と性質のぴちッと合うた人、世界じゅう捜したかって又とあれへん。あんな心の清い人、人間やあれへん、観音様と同じこっちゃ。悪口云ったら勿体なって罰あたるわ!」と言い、光子への崇拜の心を夫の前で表現している。柿内夫人は、美しくエロティックな魅力、あるいは、光子の神性とも言うべき神聖なる魔力に魅了さ

19) 竹田青嗣(1985)「バタイユの〈死〉の乗り越え」『現代思想の冒険』毎日新聞社、p.214

20) 竹田青嗣(1985)「バタイユの〈死〉の乗り越え」『現代思想の冒険』毎日新聞社、p.232

21) 三島由紀夫(1963)『日本文学研究資料叢書 谷崎潤一郎』所在 有精堂、p.88

れ、道徳意識や人格まで破戒されるのである。

結局、柿内夫妻は、光子を真ん中に入れて枕を並べて薬を飲む。翌日柿内夫人は眼をさましてみたら自分ひとりだけ生き残っていることに気付き、「ひょっとしたら、生き残ったん偶然やないかも分かれへん、死ぬまで二人に欺されたのんやないやろか」という気がしたと先生に告白している。柿内未亡人はいまだにも光子は恨む対象ではなく、恋しいという存在であるに違いないと考えている。弁護士である柿内は、知的であり、理性的であったが、最後には光子の魔性に魅惑されて心中をしてしまうが、これは、光子と柿内の性的至福であり、同性愛を利用した男女の心中であると言えよう。

4. 終わりに

本稿では、「卍」で現れている同性愛から男女関係の心中へ至る経緯について述べてみた。

「卍」は、谷崎が関西移住5年後に書いた作品である。谷崎は「卍」では、光子と柿内夫人との会話の関西語を通して古典的な表現に入ろうとしており、関西の貴い女性を通して、同性愛のエロティシズムによる心理的なマゾ・サゾを追求している。

「卍」は、光子の肉体を観音の像に重ねるところからはじまり、気高い観音を光子の肉体において求めたとき同性愛が展開される。言い換えれば、男性を排除した女性の物語からはじまっている。柿内夫人の描いた「楊柳観音」の絵は、「光子観音」になぞられる。これは、柿内夫人にとって光子の存在は最初から崇拝の対象であり、光子を神格化するということである。

しかし、綿貫という男の登場と彼の嫉妬と猜疑によって同性愛は壊れていく。三人(柿内夫人、綿貫、光子)をめぐる嫉妬が絶頂に至り、妊娠の狂言と心中の狂言が起こる。同性愛での光子は受動的であり、消極的であったが、綿貫の登場によって妖婦的、悪魔的な強者になり、自分自身を崇拝させようとする創造者になる。ここで注目したいのは、中性美を主張している綿貫の存在である。大正期に谷崎は「金色の死」で男の死を通じた中性美というエロティシズムの世界を展開している。ところが、昭和期に入ってから谷崎には、性をめぐる「死」の問題の変化を求めている。昭和期の「卍」では同性愛から心中に至る美の世界の中で中性美を求めた綿貫は外され、綿貫の代わりに柿内が現れて、「死」の美的なメカニズムに入る。

柿内夫人と光子との心中狂言で「卍」の展開は急激に変わっていく。心中狂言で先に目覚

めた光子は柿内と肉体関係の男女関係になる。光子は柿内の前で再び強者として登場し、二人に薬を飲ませて夫婦を破戒していく。光子だけが強者として振舞い、柿内は官能的な強者の光子に魅惑されて女神のように拜むのである。ところが、ある日、綿貫の同性愛の暴露で光子、柿内夫妻は心中に至る。心中の中で柿内夫人だけが行き残される。柿内はエロティシズムと死の恐怖を関連づけた「死にまで至る生の称揚」²²⁾エロティシズムの世界を実践しているのだと言える。

「卍」は同性愛に加えて、男女入り混じっての愛欲という題材の特異性があり、光子は創造と破戒の神性を備えた女神として描かれている。この作品は表面上には光子と柿内夫人との同性愛であるが、その裏には性的不能者である綿貫の異様な嫉妬の物語が潜んでおり、最後にはいつも理性的であった柿内が登場することによって、光子と柿内の男女の物語つまり、真実の卍になるのである。さらに、心中によって光子をある観念的なものへ転化することを狙っていると言えよう。

【参考文献】

- 伊藤整(1991)「谷崎潤一郎の芸術と思想」『群像日本の作家8谷崎潤一郎』小学館
 河野多恵子(1991)「心理的マゾヒズムと関西」『群像日本の作家8谷崎潤一郎』小学館
 佐藤春夫(1989)「秋タータ話」『佐藤春夫全集第1巻』講談社
 ジョルジュ・バタイユ(1973) 洪澤龍彦訳『エロティシズム』二見書房
 竹田青嗣(1985)「バタイユの〈死〉の乗り越え」『現代思想の冒険』毎日新聞社
 谷崎潤一郎(1982)「春琴抄」『谷崎潤一郎全集 第13巻』中央公論
 谷崎潤一郎(1981)「刺青」『谷崎潤一郎全集第1巻』中央公論
 谷崎潤一郎「金色の死」『谷崎潤一郎全集 第2巻』中央公論
 永栄啓伸(1992)『谷崎潤一郎伏流する物語』双文社出版
 西荘保(1987)「『卍』試論—」印度教による一つのアプローチ」『日本の文学』
 前田久徳(2000)『谷崎潤一郎物語の生成』洋々社

논문투고일 : 2013년 09월 10일
 심사개시일 : 2013년 09월 20일
 1차 수정일 : 2013년 10월 09일
 2차 수정일 : 2013년 10월 16일
 게재확정일 : 2013년 10월 21일

22) ジョルジュ・バタイユ、洪澤龍彦訳『エロティシズム』二見書房、p.16

 <要旨>

谷崎文学における死の意味

- 同性愛から男女関係の心中へ -

本稿では、「卍」で現れている同性愛から男女関係の心中へ至る経緯について考察してみた。

「卍」は、光子の肉体を観音の像に重ねるところからはじまり、気高い観音を光子の肉体において求めたとき同性愛が展開される。しかし、綿貫という光子の婚約者の登場によって、嫉妬と猜疑に覆われて、その同性愛は壊れていく。光子は綿貫の登場によって妖婦的、悪魔的な強者になり、自分自身を崇拝するように造る創造者になる。昭和期の「卍」では同性愛から心中に至る美の世界の中で中性美を求めた綿貫は外され、その代わりに柿内が現れて、死の美的なメカニズムに入る。柿内夫人と光子との心中狂言で先に目覚めた光子は柿内と肉体関係の男女関係になる。光子は柿内の前で再び強者として登場し、二人に薬を飲ませて夫婦を破戒していく。光子だけが強者として振舞い、柿内は官能的な光子に魅了されて女神のように拝むのである。ところが、ある日、綿貫の同性愛の暴露で光子、柿内夫妻は心中に至るが、柿内夫人だけ生き残る。

「卍」は同性愛に加えて、男女入り混じっての愛欲という題材の特異性があり、光子は創造と破戒の神性を備えた女神として描かれている。この作品は表面上には光子と柿内夫人との同性愛であるが、その裏には性的不能者である綿貫の異様な嫉妬の物語が潜んでおり、最後にはいつも理性的であった柿内が登場することによって、光子と柿内の男女の物語つまり、真実の卍になるのである。さらに、心中によって光子をある観念的なものへ転化することを狙っていると言えよう。

Meaning of death in literature Tanizaki

- To double suicide of male-female relationships from homosexuality -

In this paper, I tried to describe the circumstances leading to the double suicide of male-female relationships from homosexuality appearing in the “Manzi”.

The “Manzi”, when homosexuality that starts from where you superimpose the image of Watanuki the body of a photon, was determined in the body of the photon noble Kannon is developed. However, with the advent of the fiance of a photon of Watanuki, covered in suspicion and jealousy, that homosexuality go broken. Photons become creators to become the strong vamp, the demonic with the advent of Watanuki, to build and to adore themselves. Get into the aesthetic mechanism Watanuki obtained a neutral beauty in the world of beauty, ranging from homosexuality to the double suicide of Showa period in the “Manzi” is removed, in persimmon appeared instead, of death. Photon waking up earlier in the double suicide Kyogen with photon and persimmon in Mrs. become men and women relationship of physical relationship and in persimmon. Photon appeared again as the strong man in front of persimmon in, go to the couple breaking a commandment to let pills to two people. Only photon behavior as the strong, in persimmon is the worship of the goddess as are attracted to photon sensual. However, one day, photon, persimmon in the couple reach the double suicide in the exposure of homosexuality but of Watanuki, persimmon in Mrs. just survive.

In addition to homosexuality, there is a specificity of the subject matter of lust of a mix of men and women entering the “Manzi”, photon is depicted as a goddess with the divinity of creation and transgression. This work is a homosexual with persimmon in and his wife photon on the surface, but the story of odd jealousy of Watanuki is a sexual cripple is lurking in the back, persimmon inside was intelligent always the end by moth to appear, that is the story of men and women within the persimmon photon, it is become swirls truth. In addition, it can be said that it is aiming to be converted to something ideological in the photon by double suicide.